

フィリーチカにおける^{リアリティ}現実性

山田 徹也

はじめに

フィリーチカはロシアにおける散文フォークロアの1ジャンルであり、そこにはレーシイ、ヴォジャノーイ、ルサルカ等の森や水の中に棲むとされる妖怪や悪魔、または死人(しびと)⁽¹⁾、魔術師、魔女といった様々な超自然的存在が登場する。またフィリーチカとは、語り手本人やその親類、知人などの人間と上記の超自然的存在との遭遇、あるいは宝物、魔法、変身、幻等の不可思議な出来事に関する話であり、かつその内容が現実起きたこととして語られるものであると定義されている。⁽²⁾

上記の超自然的存在の中でも「死人」と呼ばれる神話的形象は、死んだはずの人間が生きているかのように行動し、話したと語られるものであり、民間信仰研究において非常に重要な位置を占めている。それはこの「死人」がルサルカやヴォジャノーイ、レーシイなどの妖怪に関する民間信仰の起源の一つとして考えられているためである。

フィリーチカを用いた民間信仰に関する研究が盛んな一方、フィリーチカそのものの形式や構造に関する研究は、その定義自体が20世紀初頭と比較的遅かったということもあり、ほとんどなされてこなかった。しかし言語学者であり、民俗学者でもあるツィヴィヤンはフィリーチカの形式に関する研究において一定の成果をおさめている。彼女は、まずフィリーチカの語りの中に存在する出来事の不可思議さは非現実的であるがゆえに現実を超えた神話的なものに属するとした。そして、そうした神話的な出来事が現実に起きたものとして語られるフィリーチカでは、その話を現実に起きたものとして聞き手が信じることができるよう機能するいくつかの言語的特徴が存在することを彼女は指摘している。⁽³⁾

しかし、こうした言語的特徴の他に、ある種のフィリーチカにはその語りを現実のものとして

(1) 本論においては何らかの原因によって超自然的存在とされる死者と通常の死者とを区別するために、超自然的存在を「死人」、単に死んだ人間を「死者」と呼ぶことにする。

(2) 塚崎今日子「ルサルカの時間」『なるうど』28号、1994年、19-27頁。

(3) Цивьян Т.В. Оппозиция Мифологическое / Реальное в поздних мифологических текстах // Малые формы фольклора Сборник статей памяти Г.Л. Пермякова. М., 1995. С.130-143.

認識させるための機能が構造的に備わっており、総体としてツィヴィヤンのいう言語的特徴とフィリーチカの構造のそのどちらもが不可思議な出来事が現実起きたのだとするフィリーチカを成立させている。

本論では、ロシアにおいて採録された「死人」のフィリーチカを例としてツィヴィヤンの考えをふまえつつ、フィリーチカにおける「現実性」について論ずる。

1. 死人

フィリーチカとは、既に述べたように散文フォークロアの1ジャンルである。フィリーチカについてソコロフ兄弟は「レーシイ、ドモヴォーイ、悪魔、ポルベリツァ、魔女、ひと言で言えば邪悪な存在、邪霊にまつわる短い話」⁽⁴⁾ であるとした。

ここでは「死人」の存在が指摘されていないが、ニキータ・トルストイは『スラヴの古代』においてフィリーチカに登場する存在として、レーシイ、ヴォジャノーイ、ルサルカ、ポレヴィーク、ポルドゥニツァ、ドモヴォーイ、バーンニク、グメーンニク、オヴィーンニク、フレーブニク、ドヴォロヴォーイ、悪魔、魔女、妖術師、そして死人などの超自然的存在をあげている。⁽⁵⁾

死人のフィリーチカとは、死んだ人間が、あたかも生きているかのように行動し、死者の遺族や恋人といった実際に生きている人間と接触する、もしくはあの世から夢を通じて現実に存在する人間と接触するという話である。

死人と他の超自然的存在については20世紀初頭にゼレーニンによってなされた研究がある。魔女や自殺者、罪人など神がその魂を受け入れようとしない、またはこの世に未練を残したためあの世に行けないと考えられている死者は「不自然な」死に方をしたとされ、その後死人になるという。またそのような死者に対する信仰はルサルカやヴォジャノーイ、レーシイ、キキーモラなどの邪霊における起源的要素の一つとされている。

ロシアにおける民間信仰においては、通常、死者の魂は死後その肉体を離れ、あの世にいくものとされる。ただし例外もあり、罪人や溺れ死んだ者、若くして亡くなってしまった者、つまりは天寿をまっとうできなかった者の魂を神は受け入れないと考えられていた。そのため、実際に罪人や事故死した人間は、普通の間がが埋葬されるような墓地ではなく、家畜用の墓地に埋められることやその事故の起こった場所に埋められることもあった。⁽⁶⁾

(4) Соколовы Б. и Ю. Сказка и песни Белозерского края. М., 1999. С.VVIII (原典は1915年).

(5) Толстой Н. И. Былички // Славянские древности. Т.1, М., Международные отношения, 1995. С.278-280、それぞれ超自然的存在の名称。レーシイは森の妖怪、ヴォジャノーイとルサルカは水に棲むとされる妖怪、ポレヴィークは野原にでるとされる妖怪、ポルドゥニツァは真昼に現れるとされる妖怪、ドモヴォーイ、バーンニク、グメーンニク、オヴィーンニク、フレーブニク、ドヴォロヴォーイは全て家に棲むとされる妖怪。

(6) Власова М. Русские суевия. СПб., 2001. С.404.

ゼレーニンは、死後、その魂が神によって受け入れられないであろうと考えられていた人間を「不自然な」死に方をした死者であり、老衰死など天寿をまっとうした「自然な」死に方をした人間とは異なるものとして分類した。⁽⁷⁾ また、彼は「不自然な」死に方をした死者が、民間信仰において天に召されず、あの世にいけなためその魂は現世にとどまると考えられているところに注目している。「不自然な」死に方をした死者は、死人となって生者の間に現れ、人に害をなすといわれる。そして同じく人に害をなすと考えられているルサルカやポレヴォーイといった邪霊とは、死人として考えられていた死者の魂が邪霊として変化して考えられるようになったものだと論じている。⁽⁸⁾

前述のとおり「不自然な」死に方をしたものは、昇天することができずに、地上に残ってしまうことになり、ひいては生きている人間に害をなすと考えられているが、死後40日間以内であれば「自然な」死に方をした人間でも死人として家族の間に現れることがありうると考えられている。

例1：「私の姉が死んでしまい、40日まであと2日というときだった。私が10時頃、家に帰ってくる途中、うちには大きなネコヤナギが生えているんだけど、そのネコヤナギの上に彼女がいるのが見えた。彼女は葬られたときの姿をして、髪を振り乱し、腕を広げ、飛んでいった。40日目には死人は飛んで向こうについてなけりゃいけないってんで、それで彼女も飛んでいたんだ。」⁽⁹⁾

通常、キリスト教徒である一般の人々は葬送の儀礼に送られ、その魂は40日後の追善供養のち神の元に召されるとされた。この期間中は生物学的には死んでいても、民間信仰的観点から見ればまだ死んでいるわけではなく、生から死へと到る過程の移行期間である。また、この最後の40日間に家族の安否や自分の死後、家族の生活が正常であるか否かを確認するために死者の魂が家の中をうろつくともいわれる。⁽¹⁰⁾ 例1に見られるように、その後40日間という移行期間がすぎれば、魂はあの世へと旅立っていくのである。

また夢などで死者が寂しさを訴え、そのため家族から死ぬ者が出るというブリーチカも存在する。⁽¹¹⁾ 死者との直接的な接触はもちろん、夢を通じての間接的な接触でさえ、直接その姿を目

(7) Зеленин Д.К. Избранные труды: очерки русской мифологии: умершие неестественною смертью и русалки. М., Индрик, 1995. С.37.

(8) Там же. С.92.

(9) Черепанова О. А. Мифологические рассказы и легенды русского Севера -СПб.: Издательство С-Петербургского университета, 1996. №13.

(10) Власова М. Русские суеверия. СПб., 2001. С.392.

(11) Там же. С.398.

で見、声を聞いたとするブリーチカでは、死者たちは生きている人間を自分たちの世界に引きずりこもうとする場合がほとんどである。例えば様々な地域で見られるブリーチカに登場する死人の有名なモチーフとして、女性が愛する恋人や夫を亡くし悲しんでいると死んだはずの人間が死人として現れ、逢瀬をかさねるうちにどんどん生氣がなくなっていく、ついには死んでしまうというものがある。⁽¹²⁾

また40日後の追善供養までの期間内ですら家に姿を現すようなことがあればそれは死者が家族と一緒に連れ去ってしまおうと考えているのではないかとされることもある。⁽¹³⁾

こうしたブリーチカからは死者とこの世の生きている人間との接触は危険であるという認識がうかがえる。死者が死人として姿を現わすということは、たとえどのような死者であれ好ましいものをもたらす者としては考えられてはいない。つまり、死人の出現は基本的に不幸の前兆である。⁽¹⁴⁾

2. ツィヴィヤンによるブリーチカ研究

ブリーチカは、前述のゼレーニンによる研究のように主に民間信仰を研究する際に用いられてきた。形式的な面で言えば、その定義についてニキータ・トルストイは

「邪霊との遭遇をあつかった短い話で、話の内容が現実には起こったと信じることのできるよう信頼性への指向が見られる。」⁽¹⁵⁾

と規定している。

ブリーチカでは空想性や非現実性といった「神話性」を「現実」に起きたものとして語るところにその形式的特徴がある。こうしたブリーチカの特徴に関しては、既にその定義をなされた20世紀に言及がある。⁽¹⁶⁾ しかしそれ以後ブリーチカ研究においては、そこに含まれる民間信仰にのみ関心が集まり、その形式や構造的なものに関する研究は現在に至るまでほとんど検討されてこなかったと言っていだろう。

(12) Там же. С.396.

(13) Черепанова О. А. Мифологические рассказы и легенды русского Севера -СПб.: Издательство С-Петербургского университета, 1996. №6.

(14) 死者が夢を通じて自分の近親者に物をねだり、それを供えると夢を見なくなったというモチーフもまたブリーチカには見られる。この場合、死者は不幸の前兆としては考えられないこともある。

(15) Толстой Н.И. Былички // Славянские древности. Т.1, М., Международные отношения, 1995. С.278-280.

(16) Померанцева Э. В. Жанровые особенности русских быличек // История культуры, фольклор и этнография славянских народов, IV Международный съезд славистов. М., 1968. С.274-292.

特に言語的な観点から論じたのは、論者の知る限りツィヴィアンが初めてである。ツィヴィアンは、自身の論文「比較的新しい神話的・詩的テキストにおける神話性／現実性の対立」において、まず民間信仰の世界観が二項対立的思考の基にして成立していると主張し、論題にもなっている「神話性／現実性」の他にも「肯定的／否定的」、「浄／不浄」、「明確さ／不明確さ」などの様々な二項対立の存在について言及している。

既に述べたようにフィリーチカでは、不可思議とされる出来事が現実にあったとされる。そのためフィリーチカの語りの中で不可思議な出来事は、内容としては「非日常的」であり簡単には信じることのできないにもかかわらず、「現実」にあったものとして語られる。その点にフィリーチカの持つ矛盾が見られる。

ツィヴィアンは、この非現実性、不可思議さといったものを「現実性」とは対立する「神話性」が生み出しているとする。そして対立する「現実性」と「神話性」がフィリーチカの中に同時に存在するという矛盾を合金であるアマルガムに例え、「神話性と現実性のアマルガムは、現実性と神話性を切り離すためのおそらく唯一の可能性のある基準である「真実」や「事実」（そしてそれらの弱まった形として「信頼性」）という概念へと指向させる」と述べている。⁽¹⁷⁾ また、フィリーチカという「合金」が存在しえるのは、フィリーチカの目的あるいはメカニズムが「神話を現実へと方向付けること」⁽¹⁸⁾ であるためであるとする。

つまりツィヴィアンによれば、フィリーチカで語られている神話的な出来事を現実にした出来事として語るために、その語りを「真実」、「事実」だと主張すること、もしくは語りに対して「信頼性」を付与し証明しようとする傾向がフィリーチカに見受けられるのである。そしてツィヴィアンは、「フィリーチカの本質とは、現実を超越した神話性を与えることであり、そして証拠となる経験に対する言及によって語りの信頼性の絶対的な強調が伴う。」⁽¹⁹⁾ と論じ、語りの内容の現実的であることを証明するための言語的な特徴がフィリーチカでは見受けられることを指摘している。

フィリーチカにおいては少なからず語り手自身が不可思議な現象を体験したと語られる。このような場合、自分自身が体験したと語ることによって、その話の内容が単なる風評やうまかせではないことを強調することになる。語り手は自分自身をその「証人」としてあげ、語りを「証言」の形式としているのである。⁽²⁰⁾

フィリーチカが「証言」の形式を持っているということは、すでにフィリーチカの定義をした

(17) Цивьян Т.В. Оппозиция Мифологическое / Реальное в поздних мифологических текстах // Малые формы фольклора Сборник статей памяти Г.Л. Пермякова. М, 1995. С.131

(18) Там же. С.134.

(19) Там же. С.133.

(20) Там же. С.138.

ポメラントゥェヴァの指摘するところであるが、それに加えツヴィヤンは自分自身による「証言」の内容が「見た」というものもあれば、自分で「触った」、あやしい音を「聞いた」などと語られることが多いことを指摘する。単純に超自然的存在と遭遇し、見たというだけではなく、視覚以外の五感によっても超自然的なものを感じたと語ることでその語りの真実味を増させているのである。⁽²¹⁾

また「証人」は自分自身以外の場合もある。そのような場合、「証人」となるのは、大体自分の親族、あるいは自分の周辺の間人全員、物事をよく知っていると考えられる老人たちである。つまり、フィリーチカにおいて語られる出来事が信用できる証拠として、語り手が「皆がそういていた」、「父自身が見た」、または「叔父さんが見た」と語り、自分に近い人間や周りの人間の言葉を引用することによって、語りの内容を一種の「権威付け」しているのである。⁽²²⁾

また語りの最初や最後に「あった было、бывало」という言葉ともに「これは実際にあったことだ」、「こういうことがあった」と語られる場合もある。こうした言葉は単純に何か不可思議な出来事があったと語るだけではなく、こうしたことが以前にも起こっていたとその頻度を語ることによって話の「現実性」を増幅させているのである。

またこの点に付随して、この表現を昔話の形式とこの「あった」という表現を組み合わせることで虚構である昔話と出来事が実際にあったとするフィリーチカを対比させることによって、よりフィリーチカが現実にあったということを「強調」しようとするという手法も見られる。⁽²³⁾

これらツヴィヤンの取り上げた言語的特徴は、神話的な話における「現実性」に対する「信頼性」の向上をさせるものとして機能している。こうした「信頼性」を語りに付与することによって神話的な語りの「現実性」を聞き手にとってより明確化する。それは語りを「現実」へと指向させるということである。

3. フィリーチカにおける現実性

ツヴィヤンは、フィリーチカの神話的な出来事を現実のものとして語るために語りの「信頼性」を付与するという手法がしばしば用いられていることについて注目した。実際にツヴィヤンがあげたものはフィリーチカに頻繁に見られる表現方法であり、その点に関して論者も否定するものではない。しかし、フィリーチカの持つ機能は神話的な内容を現実のものとして指向させようとするだけではない。それ以外にもフィリーチカの構造や比喩表現が、ツヴィヤンの指摘した言語的特徴の機能とは逆に現実に対して「神話性」をもたらすこともある。

(21) Там же. С.139.

(22) Там же. С.133.

(23) Там же. С.137.

フィリーチカにおいては様々な出来事が不可思議なものとして語られる。死人のフィリーチカの中でも死んだはずの夫や恋人の姿を見たというフィリーチカにはその「神話性」は出来事自身に備わっている。

例3：「うちのとこのガールカなんだけどね、彼女の息子が病気だったんだけど、彼女が言うには、夫が彼女のところにきたんだってさ、こんなに背が高くて、黒いひげを生やして、ずっと息子をほしがっていたって、それでも彼女は息子をわたさなかったんだ。」⁽²⁴⁾

こうしたフィリーチカでは死んでしまったはずの人間がその姿を見せ、生きている人間と会話すら交わすとも語られる。こういったフィリーチカでは出来事自体が不可思議なものとして語られ、出来事に関する語りだけで神話的語りとして成立し、自分の知人の「ガールカ」が夫の死人と遭遇した語られることにより、現実起きたのだという「現実性」を明確化させているのである。

しかし、ある種のフィリーチカでは、その不可思議とされる出来事が現代の我々の目から見ても非現実的だとは言い切れない場合もありうる。例えば以下のようなフィリーチカである。

例2：「わたしたちが火事があったとき、私の夢に父と母と叔母がでてきた。彼らは全員、以前すでに死んでいた。彼らは全身黒い格好をして、床に寝て、私を彼らの所に来て寝るように呼んでいた。それで私は、「なんでそうしなくちゃいけないの、私はここで、セリョージャと寝るわ」といった。彼らは三回私のことを呼んだが、私は彼らのところにいかなかった。この夢は実現してしまった。全部燃えてしまって、生き残ったのは、私とセリョージャだけだった。もし私が、彼らのところにいたら、わたしも火事にあって焼け死んでいただろう。」⁽²⁵⁾

死んだ家族の夢を見ること、そして火事があったこと、これらの出来事を別個のものとして考えるならばさほど不可思議な出来事という感覚はあまりない。死んだ家族の夢を見ることと火事にあうこと自体は確かに頻繁に起こる出来事ではないが、少なくとも実際に起きうる「現実的」な出来事だからである。

一方、この話が神話的な語りとして成立しているのは、語られている死者の夢を見たことを火

(24) Черепанова О. А. Мифологические рассказы и легенды русского Севера. СПб.: Издательство С-Петербургского университета, 1996. №29.

(25) Там же. №40.

事にあったという二つの出来事が原因とその結果の因果関係として結び付けられているからである。夢を見ること自体はありうることであっても、それが正夢となることでその夢を見たという出来事が神話性を獲得するのである。⁽²⁶⁾

このブリーチカにおいては夢を通じた死者との接触が不幸を呼んだ直接的な原因として考えられている。出来事そのものが不可思議だと考えられていないブリーチカでは、不可思議さというものは、例3のような出来事そのものからではなく、例4に見られるように複数の出来事を結びつけることによってそこに因果関係を見出した際に表れる。不可思議さを演出するのは出来事ではなく、因果関係として解釈できる複数の出来事の関係性なのである。

また、複数の出来事に因果関係を設定し、「神話性」を与えるのとは別に単一の出来事であってもその出来事が起きた「時間」や「場所」が超自然的なものとの接点として考えられている場合、語りは「神話性」を獲得する。

たとえば、先述の通り、「不自然な」死に方をした死者は、死人となって生者の間に現れる。こうした死人が現れるのは大抵その死を迎えた場所や墓場である。現代の日本の怪談においても墓場や自殺者が出た建物には幽霊がでると語られることがある。またブリーチカにおいてもこうした墓場や自殺者が出た建物は現実に存在する場所であるが、神話的场所という超自然的存在との接点として出来事に「神話性」を与えるものとして作用する。また「自然な」死に方をした死者も追善供養の行われる40日間までに姿を見せることがあると考えられている。こうした40日間もまた神話的な時間として出来事に「神話性」を与えるものとして機能する。

例4：「夫が葬られる六週間、私は病気で寝ていて、ひどく具合が悪くて、私のばあさんがついていてくれた。突然、家に鳥が飛んできて、私の枕元にとまり、ちょっと羽ばたくと、飛んでいってしまった。私はばあさんに、なんだったのだろうと訊くと、彼女は私に十字を切り、目にたいして十字を切れ、十字を切れと言った。」⁽²⁷⁾

魂は例1として挙げたブリーチカのように生前の姿で現れることもあるが、鳥などの動物の姿で現れることもある。このブリーチカの場合、鳥が夫の魂であるとは明記されていないが、話の前後からこの鳥が死んだ夫の魂であると考えられうる。語り手の祖母が鳥の到来を不吉なも

(26) こうした夢に関するブリーチカでは、例としてあげたような実際に起きた出来事同士を結びつけることもブリーチカとして成立している。それは夢という「現実的」出来事を予兆として考え、それに続く予兆の示す出来事を仮定することによってその間に因果関係を結び、神話性を与えていると考えられよう。例外として、夢のなかで正者自身があの世を体験してきたというものがある。こうしたブリーチカではあの世にいて帰ってきたという出来事そのものが神話的である。

(27) Там же. №12.

のとして十字をきるように語り手に命令したのはそれを死人が来訪し、語り手を道連れにしようとしているのだと考えたのではないと思われる。⁽²⁸⁾

例3のフィリーチカのような死んだ人間の姿を見たという現実的にはありえない不可思議な出来事を語ったフィリーチカとは異なり、鳥が飛んできたという出来事そのものはさほど不可思議なものではない。出来事自体で考えるならば現実的にもありうることである。このフィリーチカでは、夫が死んだばかりであるという神話的な時間的条件と鳥が枕元に飛んできたという出来事の関係性が、語りに「神話性」を獲得させているのである。

「現実性」と「神話性」という対立するものを内包するフィリーチカにおいてツィヴィヤンは神話的な語りであるにもかかわらず「現実性」を強調するために視覚の他、触覚や聴覚による情報がその証拠としてあげられていると指摘した。これは語りに「信頼性」を付与することによって、語りの「現実性」をより明確にする方法である。

しかしツィヴィヤンのいうものとは別に、比喩的表現がその語りを不可思議な出来事を現実にあったとするフィリーチカとして成立させる要因となることもある。

例5：「父さんが死んで40日目、わたし達は横になって寝ていた。雪がざくざく鳴り、まるで家畜小屋に向かって歩いていくような足音が、聞こえるんだ。そこには馬具が掛かっていたけど、家畜小屋で、まるで誰かがそれを投げたみたいな音を立てて落ちたんだ。父さん以外の何者でもない。父さんは、彼が死んで40日経つ前に自家製ウォッカを蒸留し始め、飲むのが気に入らなかったんだ。そんなわけがちゃんと音がした、わきに投げたんだ。そしてそのあと台所で、両手でフライパンの上を手探りするような音がした。そのあとまたがちゃんという音がし始めた。

父さんが死んで40日目、わたし達は追悼しはじめたが、私は父さんにウォッカをついでやるのを忘れていた。そのあとウォッカをつぎ、机の上に置いた。と、そこへ息子がやってきて、「なんで母さん達のところに、ウォッカが零れているんだ？」と言った。杯を持ち上げたら、底がはがれて、全部流れちゃった。」⁽²⁹⁾

このフィリーチカでは、語り手の父親が死んであの世にいく40日目に馬具を「誰かがそれを投げたみたいな音」や「両手でフライパンの上を手探りするような音」が聞こえたと言われ、その音が死人の存在の「証拠」となっている。

不可思議な出来事を実際にあったものと語るための「証人」による「証言」として最も信頼性

(28) チェレパーノヴァもまたこのフィリーチカを死人のフィリーチカに区分している。

(29) Там же. №4.

が高いのは、自分自身や近親者が不可思議な出来事をその目で見たと語ることである。それは現実性の「強調」として視覚的情報が五感の中でもっとも信頼性が高いためである。したがって怪しい物音を聴いたという聴覚による「証言」や何かに触ったという触覚による「証言」の信頼性は、「現実性」の強調という側面においては視覚的「証言」による信頼性よりも比較的劣るものである。⁽³⁰⁾

この視覚以外の五感による「証拠付け」の信頼性の低さは、あいまいさ、不明確さといったものを語りの中に持ち込む。「ような、まるで как、будто」といった言葉を伴う比喻表現は、例5として挙げたブリーチカでは「まるで家畜小屋に向かって歩いていくような足音」「まるで誰かがそれを投げたみたいな音」がしたと語った後、語り手はそのままそれが超自然的存在として父親が還ってきたからと「父さん以外の何者でもない」のだと断定している。そのためこれら二つの聴覚的証言が語り手にとって死人が還ってきた論拠として考えられているのは間違いないと思われるが、この比喻表現は既に死人という超自然的存在の干渉を暗示するものとして語られている。

聴覚など視覚以外の五感による「証言」は、超自然的存在の目で見たとという視覚的証言よりもあいまいであるがゆえにあたかも超自然的存在がそこに関与しているかのような比喻表現がそこに用いられることがある。こうした比喻表現は、ツィヴィヤンの指摘している言語的特徴とは異なり、語りの中に信頼性を生み出すものではない。逆に証拠のあいまいさを利用し、出来事に「神話性」を与えるものとして機能しているのである。

結論

ブリーチカという不可思議な出来事を現実のものとして語る散文フォークロアにおいては、そこで語られる出来事を「非現実」的な事件であるとしつつも、それが「現実」のものとして語らなければならないという矛盾を内包している。

ツィヴィヤンは、その矛盾を語りの内容が神話的でありながらも、その語りの「現実性」を「信頼性」の付与という形で語っているためであると考えた。そしてその結果として幾つかの言語的特徴の存在について指摘した。

しかし、一方でそれ以外にも多くのブリーチカの持つ構造的特殊性が不可思議な出来事を現実のものとして語るものとして機能する。ブリーチカにおいて語られている出来事は全てにおいて不可思議な神話的出来事ではない。一つのブリーチカの中で複数の出来事について語られているとき、個々の出来事が非日常的なものでなくとも出来事と出来事の間超自然的存在によ

(30) Цивьян Т.В. Оппозиция Мифологическое / Реальное в поздних мифологических текстах // Малые формы фольклора Сборник статей памяти Г.Л. Пермякова. М., 1995. С.139.

る介在があったのではないかと因果関係を設定した場合、語りとしては現実として起こりうることでありながらも不可思議な出来事に関する話として成立する。

また追善供養の40日間といった神話的時間、墓場、自殺者の出た家屋などの神話的空間において起きた出来事もまた不可思議な出来事として語られる。このようなフィリーチカの場合、出来事自体が既に「現実性」を帯びた事件だからこそ、神話的な因果関係によって「神話性」が与えられていても現実にあったとされる不可思議な出来事の話として語られうる。

またはっきりと超自然的存在を見たとする視覚的証言にはないあいまいさが他の五感による証言には存在するために「ような、まるで как、будто」という比喩表現が用いられる。ツヴィヤンにとってあいまいさ、不明確さとは、フィリーチカにおける出来事を「証言」によって「証明」する際の弱さでしかない。しかし、あいまいさは不明確であるがゆえに出来事に対し「神話性」を与えることがあるのである。

神話的な出来事の「現実性」を明確化する場合においても、それとは逆に現実的出来事の「神話性」を明確化する場合においても結果的には現実に起きたこととして語られうる不可思議な話としてのフィリーチカは成立する。後者の場合、出来事が現実そのものであり、「現実性」は出来事そのものに備わっているために語りは神話化を必要とする。これらの「現実性」の表現の手法の差は、単に対立する「現実性」と「神話性」のどちらを基盤とする出来事が語りを選択されているのかによっているのである。